



心を整える

校長 神田 朋恵

入学式で1年生と「挨拶、返事、後始末（自分のことは自分です、靴のかかとを揃える）」という3つの約束をしました。もちろん始業式でも全校児童に伝えました。その成果か、1年生が実によく挨拶をしてくれます。刺激を受けたのか、他学年も大きな声で、そして目を見て、時に立ち止まって丁寧に挨拶をしてくれます。教室を見に行っても同じです。給食時にも「おはようございます。」なんて言われます。微笑ましいです。今月の講話朝会では、改めて靴の踵を揃える話をする予定です。

はきものをそろえる

はきものをそろえると 心もそろう 心がそろうと はきものがそろう
ぬぐとときにそろえておくと はくときに心がみだれない
だれかが みだしておいたら だまってそろえておいてあげよう
そうすればきっと 世界中の人の心もそろうでしょう

藤本 幸邦（ふじもと こうほう 1910～2009年） 長野県円福寺住職



履物（靴）を揃えるという文化は、日本だけかもしれませんが、私は大切な文化だと考えています。靴箱に靴を入れる時、揃えるにはひと手間がいります。このひと手間をかける時が「心が整う」瞬間だと思います。この詩は第二次世界大戦後、親を亡くし、スリや置き引きなどをしていた子どもたちに心を痛め、自分のお寺で育てることを決意した藤本住職が作りました。引き取る子どもの数が増えるにつれ、玄関に脱ぎ捨てられた履物が重なったり、バラバラになったりしているのを見て「履物をほったらかしにしておくと、また戦争になってしまいますよ。」と誰にでもわかる、やさしい言葉で伝えるために作られたといわれています。私は「後から来る人のことを考える」「相手のことを思いやる」ということも示唆していると考えます。

担任をしていた頃、「靴箱に入っている靴の入れ方を見ただけで、クラスの雰囲気がわかる」と聞き、恥ずかしい話ですが自分で児童の靴を揃えていたことを思い出します。その後経験を重ね、教室では「席を立ったら椅子を入れる」ことも徹底するようになりました。これも履物を揃えることと同じで、自分のことを最後まできちんとできているか、相手のことを思いやっているか、ということです。これは“国民教育の父”と言われた森信三先生の「躰の三原則」にも繋がります。

皆様の御家庭では、履物を揃えるという文化はありますか？

4月、子どもたちは学級生活に慣れることに、教師は学級づくりに懸命に取り組みました。5月、連休明けから運動会の練習が始まります。今度は学年で練習する時間が増えるので、複数の眼で子どもたちを見ていきます。運動会では、達成感や団結力、所属意識を味わってほしいと願っています。しかし、暑さや慣れないことに戸惑う子が出るかもしれません。御心配御不明な点がございましたら、いつでもすぐに御相談ください。地域の皆様にも公開します。申し訳ないことに運営・場所の関係で座席を設けることはできませんが、どうぞ御参観ください。今月も、よろしくお願いいたします。